

IPT 研究者は独自のミドルウェアを構築する傾向にあるが、商用ミドルウェアを扱う企業と同じ場で議論することは、双方にとって非常に有意義であると感じられた。

次回の IPT2006 はアメリカに戻る予定であり（会議終了時点で詳細は未定）、また EGVE はポルトガルにて開催される予定である。両者の共同開催は非常に興味深いことから、今後も定期的に共同開催されることが期待される。

関連サイト：<http://www.vrmedialab.dk/pr/ipt2005/>

ISWC 2005

山添大丈

ATR

The ninth International Symposium on Wearable Computers (ISWC2005) に参加したので、会議の様子について報告する。ISWC は IEEE 主催のウェアラブルコンピュータに関する国際会議であり、今年は 10 月 18 日から 21 日まで大阪産業創造館で開催された。

今年は 125 件の投稿があり、16 件が Full paper, 12 件が Short paper, 17 件が Poster として採択された。発表はオーラルセッションとデモ・ポスターセッションの二つからなっており、オーラルセッションでは、“HCI Output”, “Hardware”, “Context”, “Clothing & Textile”, “Augmented Reality”, “Recording Experiences”, “Gesture”, “HCI Input” の 9 セッションで 28 件の発表があった。

デモ・ポスターセッションではポスター展示に加えて、15 件のデモ展示があり、日本開催ということもあってか日本からのデモ展示・発表が目立ったように感じた。

基調講演としては、筑波大の山海嘉之先生により、“The Leading Edge of Future Technology “Cybernetics”: Project HAL - toward Robot Suits and Cyber Suits?” としてロボットスーツ HAL についての講演があった。

招待講演では、海外からの参加者に対して、日本にお



ISWC2005 会場の様子

ける携帯電話サービスについて紹介するというところで、KDDI の Matsunaga Akira 氏により “Overview of “Keitai” (Mobile phone) Services in Japan” と題した講演があった。

また、20 日にはウェアラブル機器を用いたファッションショーも開催され、多くの人が集まっていた。最終日にはそれぞれが製作したウェアラブル装置などを紹介する “Gadget show” が行われ、会議終了後には、日本橋「でんでんタウン」への “Gadget tour” も行われ、これらのイベントはウェアラブルの会議ならではの感があった。

会議の最後には、Best Paper Award が発表され、“Fine-Grained Activity Recognition by Aggregating Abstract Object Usage” を発表した Donald Patterson らが受賞した。

次回 2006 年はスイス、モントルーで開催される。

私は参加できなかったが、18 日には並催のワークショップやチュートリアルも開催されていた。プログラムの詳細や会議の様子などについては、会議のウェブサイト www.iswc.net まで。

UIST2005

蔵田武志

産業技術総合研究所

UIST (the 18th Annual ACM Symposium on User Interface Software and Technology, 2005 年 10 月 23-26 日、開催地：シアトル) は、ユーザインタフェースに関する会議の中では発表レベル及び知名度の最も高い会議の一つである。私にとっては初の UIST 参加であったが、発表内容は、GUI や Web インタフェースなど従来からある WIMP 的なものから、音声、VR や AR・MR、ウェアラブルやユビキタス、タンジブルといった分野まで多岐に渡っており、非常に勉強になった。特に Projection のセッション（チェアの方が “Fun with Projectors” というようなセッション名に変更していた）は、モバイルプロジェクタが実用化されつつあることもあり、興味深かった。

今回の参加者数は 270 名を超え、UIST 史上もっとも多くの参加者を集めたようである。これには、開催地がシアトルであったため、マイクロソフトやインテルリサーチ、アドビ、グーグルなどといった IT 関連の大企業やそれらと結びつきの強いワシントン大などが近いという理由もあると思われるが、大型ディスプレイやプロジェクタなどの出力デバイス、小型センサやモバイルカメラ、RFID タグ・リーダなどのセンサ・入力デバイスに代表されるインタフェース技術の進歩、さらにはウェブやケータイ文化の浸透など様々な要因により、ユーザインタフェースに対する期待や注目がこれまで以上に高



UIST 2005 Demo reception (論文発表もあった大阪大学の Delphian Desktop の他、多数のデモで盛り上がった)

くなっていることの現れではないかと考えている。採択率についてであるが、個人的には、20%を割ると、完成度が低くても優れた発想に基づいた研究成果を含めることができなくなると常々感じているが、フルペーパーと TechNote の採択率は 19%(30/158)であり、発表内容もよいバランスであったと感じた。Best Paper Award には、MIT CSAIL の Bolin 氏ら (Miller 助教授のグループ) の “Automation and Customization of Rendered Web Pages” が選ばれた。

来年の UIST は 10 月 15 日から 18 日にかけて、スイスの Montreux で開催される。ISWC (International Symposium on Wearable Computers) も同地で UIST の直前の 10 月 11 日から 14 日にかけて開催される予定であり、どちらも例年以上に盛り上がるのが期待される。

<http://www.acm.org/uist/>

■ VRST2005

北村喜文

大阪大学

ACM の SIGGRAPH と SIGCHI の主催の Symposium on Virtual Reality Software and Technology (VRST 2005) に参加した。12 回目となる今回の VRST は、アメリカ・カリフォルニア州のモンレーにある Naval Postgraduate School (NPS) で、11 月 7 日 (月)～9 日 (水) の 3 日間に渡って、NPS の Gurminder Singh 氏を Conference Chair として開催された。会場となった NPS は、日本語に訳すと海軍大学院大学となるが、実際には海軍だけではなく、陸軍や空軍の関係者も多く学ぶ大学院大学である。これらの人は通常は普通の服装で通学するようであるが、会議 2 日目の 8 日は「ユニフォームデー」という皆が制服を着て通学する日で、実際、キャンパスには各軍の制服姿の人が多数見られ、すれ違う時には敬礼をするなど、独特の雰囲気があった。なお、NPS も軍関連施設の一つであり、事前にパスポート番号を登録した人しかゲートの中に入ることができなかった。それゆえ、会議への

事前登録無しの「当日参加」はありえないことであった。

プログラムは、1 件ずつの Keynote と Invited Talk、20 件の Long Paper (1 件当たり質疑応答を含めて 30 分の時間枠)、21 件の Short Paper (同 12 分) から構成され、これまでの VRST と同様、シングルトラックで進行された。Long Paper は 55 件の投稿から採択されたようである。Short Paper は Long とは別枠で募集されたが、投稿数は不明である。初日のオープニングに続く Keynote では、筑波大学の岩田洋夫先生が、Art and Technology in Interface Devices という題で、これまでの SIGGRAPH Emerging Technologies など披露されてきたご研究を中心に紹介された。一般の発表としては、日本からは 2 件が Long Paper として採択されていた。その他、アメリカだけではなく、ヨーロッパ方面からの発表・参加も多かった。これまでの VRST ではグラフィックスや衝突検出の話題も多い傾向にあったが、今年は、インタラクションや協同作業などに関連した内容が多いように思われた。会議への参加者数は 70 名ほどということで、やや小じんまりとしていたが、各発表には最低でも 3～4 件程度の質問が出るなど、質疑応答は総じて活発であった。

初日の夕刻には、NPS の MOVES (Modeling, Virtual Environments and Simulation) Institute の Open House が VRST 参加者のために催された。実戦に即したかなり精度の高いヘリコプターの操縦シミュレータのデモや、前線のヘリコプターや潜水艦などに地形やセンサなどの解析データを 3 次元グラフィックスとして可視化する Web ベースのシステムのデモなどがあった。

VRST の予稿集は ACM Press から出版され、論文は ACM の Digital Library にも掲載される。来年の第 13 回 VRST は、10 月末～11 月初旬の 3 日間に地中海に浮かぶ島キプロスで開催される予定である。10 月中がキプロスの天候が良いとのことであるが、ACM 主催の UIST や CSCW, Multimedia, また ISMAR など、この時期には関連する国際会議も多く、これらとの競合をできるだけ避けるため、日程を調整中である。

VRST に関する詳細情報は、<http://www.vrst.org/> を参照のこと。